

論壇

業務特化で小国繁栄

欧州のルクセンブルクに金融関係の会議で来ている。人口60万人程度の小国でありながら、1人当たりのGDPが世界でもっとも高い国として知られている。歴史は古く、私が宿泊しているホテルの周辺はユネスコの世界遺産に登録されている美しい古都である。かつては鉄鋼の重要な産地としても知られていたが、今や世界的な金融のセンターとして繁栄を続けている。

ドイツとフランスとベルギーに隣接した内陸の小さな都市国家で

伊藤 元重

学習院大教授(国際経済学)

欧州グローバル化の行方

あるが、金融のグローバル化の波に乗って、世界中の金融機関が集まっている。日本の三メガバンクや野村証券のような大手企業も、現地に進出している。日本で売り出されている投資信託のおおよそ40%ぐらいが、ルクセンブルクに本籍を置いているという。

興味深いことに、ルクセンブルクに多くの投資信託が籍を置いてあると言っても、こルクセンブルクに多くの金融の専門家がいて、資産運用を行っているというわけではない。実際の株式や債券の運用はロンドンなどの金融センターで行っているのであり、ルクセンブルクでは業界の人たちがバックヤードと呼ぶ、後方の様々な支援業務が中心に行われている。専門用語でカストディと言ったり、投資信託の管理に伴う諸々の法的あるいは会計的処理をこで行っている。

そうした後方支援的な作業だけで世界中から多くの専門家が集まり、そこで働く人たちは世界で

主要国で選挙相次ぐ

ここルクセンブルクにおいて、イギリスのEU離脱の話が大きな話題となっている。金融のグローバル化によって繁栄を続けるルクセンブルクのような都市国家にとつては、世界最大の金融センターであるロンドンがEUから離れるようなことになると、ルクセンブルクの金融都市としての機能にも影響が出かねないからだ。ルクセンブルクのような立場で言えば、一般論としてはグローバル化の流れが止まって逆方向に向かうことを警戒することになる。ただ、一方でイギリスがEUからの離脱をした後、ロンドンの金融センターの機能が一部がルクセンブルクに移ってくる可能性はあるのか、というような損得の議論も行われていた。イギリスのEUからの離脱は、欧州の経済秩序に大きな波紋を投げかけている。金融という一つの部門だけに限定しても、その影響には計り知れないものがあるのだ。

欧州では、3月にオランダの選挙、その後のフランスの総選挙、ドイツではその頃前哨戦となる地方選挙、そして秋には国政の総選挙が行われる。移民反対や欧州統合に消極的な極右政党などの支持層が増えているとも伝えられている。これらの選挙の結果いかによっては、日本にも大きな影響が及ぶことにもなりかねない。今後の欧州の政治情勢の動きから目が離せない。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。